

教養教育科目「江戸絵画の見方」について

佐藤 琴
(山形大学基盤教育院)

はじめに

私は平成11年から平成23年3月まで宮城県立の歴史博物館において美術史(日本近世絵画)を専門分野とする学芸員として勤務していた。平成23年4月から山形大学基盤教育院の一員となり、高等教育という未知の世界において戸惑い悩みつつも作り上げた教養教育科目「江戸絵画の見方」についてその概要と反省点を報告するものである。教員としての経験は3年足らずであり、授業内容・教授方法ともに未熟であることは日々強く感じているところである。

ところが、思いがけなくも平成25年度のベストティーチャー賞(教員選考)の受賞の栄に浴した。全く予想外のことであるだけでなく、自分がそれに相応しいか、はなはだ心許ない。しかし、私が試行錯誤しながら作り上げつつある「江戸絵画の見方」は山形大学の基盤教育として大きく外れてはいなかったという評価と思いほっと胸をなで下ろした。現在はより良い授業を目指してなお一層の精進をすべしという激励であると受け止めている。

本稿は受賞対象となった当該授業における自分なりの試みとそれに対する受講生の反応を記録し、基盤教育と今後の己の授業に資することを目的とする。

教養教育科目「江戸絵画の見方」

本科目の位置づけは「基盤教育 教養科目 文化論」である。開講時期は前期であり、初めて大学で学ぶ一年生に向けて高等学校では全く経験したことのない内容を通して大学教育の奥深さを感じてもらえればと思い設定した。

この授業には以下の3点を伝えることに力点を置いている。

- ①絵画は物質である。
- ②絵画は画家が見たものをそのまま描いているのではない。
- ③答えは全て絵画のなかにある。

まず、1点目の「絵画は物質である」について説明しよう。受講者である大学一年生はもちろんのこと、一般的な認識として絵画とは一部の人々に愛好される芸術であり、嗜好品であるというイメージが漠然と形作られていると思う。これは私が博物館学芸員として勤務していた期間に来館者はもちろん同僚からも直接言われた経験に基づいており、あなたがち外れてはいまい。つまり、絵画とは画家の人生や心情を投影した芸術作品であり、感覚的に味わうに過ぎないものであると考えられている。それは一面では真理であろう。しかし、「美しい」「みにくい」などの感覚で捉えるだけでは、作品が何を表現しているのか見えてこない。また、鑑賞者に「美しい」と感じさせるのは、言葉で表現しがたい「センス」というものもあるが、構図やモチーフの表現方法などの作画技術に加えて、支持体である紙や絹と顔料や染料などの素材自体の光沢や鮮やかな発色など、素材としての質の高さや美しさも重要な要素である。

また、大学の教室における授業時間内では体感することはなかなか難しいが、江戸時代の絵画は人々の生活を彩るものであった。掛軸は床の間などの壁にかけられ、屏風は部屋を仕切る道具として使われた。絵画作品について知るためにはその実用としての側面を除いてはなるまい。

そして、絵画の制作には材料費がかかる。画面が大きければ大きいほど、使われている顔料が鮮やか

で発色が良ければ良いほどそれらの価格は高い。一つの作品にかけられている手間とコストから、その作品が誰に向けて作られているのかがわかる。このような絵画作品の物質としての側面を無視して、芸術的な価値ばかりを語ることはできない。本授業の初回から5回目までは絵画のかたち、大きさ、素材などについて説明した。

2点目の「絵画は画家の見たものをそのまま描いているのではない」については、その絵画が何を表現しているのかを受講生に説明させたときに必ず出てくる発言によく表れている。それは「画家がその光景に感動したから描いたのである」というものである。現代社会においてカメラで静止画や動画を撮影することは何ら特別なことではない。画面に写るものは現実の光景を切り取ったものだという概念がそれとは知られぬまに人々の意識に浸透していると思われる。絵画とはそのような不自由なものではない。一つの画面のなかに一瞬の出来事だけでなく、長い物語、古い歴史、四季を違えずに咲く花、さまざまな世代の人々など、異なる場所や時間を組み合わせ描くことができるのである。

そして、現代においてもそうなのだが、近代以前の職業的な画家は発注者もしくは買い手を想定して作品を制作している。現代の美術教育において自分が表現したいものを自由に表現するようという指導がなされているため、作品とは制作者の心情を反映したものだという先入観が形成されているのではないだろうか。

しかし、職業的な画家であればあるほど、自己の表現と発注者の意向を融合させることを考える。画家は描きたいものを描いていたとしても、それが全てではない。この点について、作品と現実との世界との比較を行い、現実を忠実に写しているところと、そうではない部分を切り分けていくことにより自ずと明らかになる。このためには作品の細部まで観察する必要がある。

だからこそ、3点目の「答えは全て絵画のなかにある」と言えるのである。そして、作品観察力を高めるために、いくつかの課題を用意した。

まず初めに受講生に課題として課したのは「猫を

探しなさい」である。平成25年春、仙台市博物館で開催されていた特別展「東日本大震災復興支援 若冲がきてくれました プライスコレクション 江戸絵画の美と生命」は授業のテーマである江戸絵画の本物を間近で見ることのできるまたとない機会である。この展覧会の自由見学にあたって「猫が描かれている絵を探しましょう」と指示をした。

絵画は時代によって描写法が異なり、現代の目では「古くさい」「美人画だけど美人に見えない」と感じてしまうことが多い。それもまた当然のことである。したがって、まずは江戸時代の絵画に目を慣れさせるために誰が見てもそれとわかる「猫」を探すよう課題を出したのである。加えて、画面のなかから何かを探そうとすると、結果的に見つかるまで全画面を満遍なく見ることになる。まずはこうやって見慣れない江戸絵画に目を慣らすことが重要である。これによって意識的に絵画を見るということを身につける第一歩ともなる。

次の課題はある絵のスライドを見せ、そこに「何」が描かれているのか全て言葉で書きあらわしなさい」というものである。見ることによって得られた情報はそのままでは漠然としていて時間が経つと消えてしまう。しかし、描かれているモチーフに「女性」や「猫」と名付けることにより、その絵画は「猫」の絵だと認識することができる。

本年度の授業では最初に土佐光起「牡丹猫図」(図1)についてこの課題を実施した。

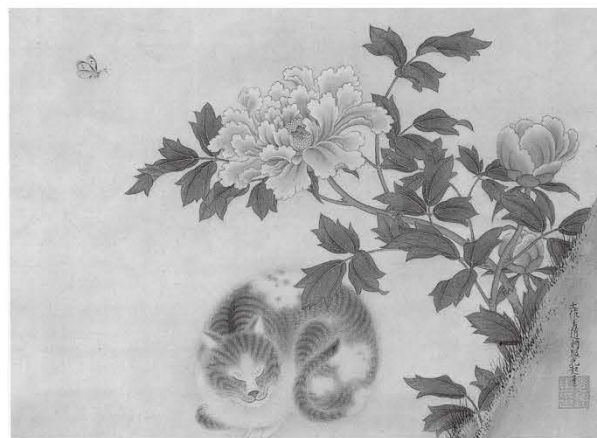


図1 土佐光起「牡丹猫図」一幅 相国寺蔵

受講生が記述した文章は、その場で何人かを指名して発表させる。慣れない受講生は「牡丹と猫と蝶」が描かれているというだけで説明が終わってしまう。このような場合にはさらに質問を加える。

「猫は何をしている？」

「眠っている」

「どんな風に眠っている？」

「両目を閉じて体を縮めて」

「尻尾はどうなっている？」

「左脚のあたりで先っぽが上を向いている」

「ほら、まだまだ沢山書くことはあるでしょう」

このように描かれている要素を言葉で限りなく細分化していくという作業によって、観察が深めていくことができるのである。

加えて効果的だったのは、何人かの受講生に自らが記載した記述を読み上げてもらい、自分の記述にそれが書かれているか、各自で答え合わせをすることである。その場にいる受講生は等しく同じ絵を見ている。にもかかわらず、それぞれが見つけているものは違う。そのことに気づくことで自分の目は何を見て、何を見ていないのかということをはっきりと理解することができる。この課題を何度も繰り返すと受講者の観察力は確実に向上した。

また、描かれているものを記述せよという指示をしても、絵から受ける印象について書いてしまう受講者もいる。彼らに対しては、何故そう思うのか、根拠を示すよう指示した。芸術作品の鑑賞というどうしても作品から「何を感じるのか」になってしまい、それは個人の感性の問題のようにも捉えられがちである。しかし、「感じる」ことにも必ず根拠がある。「何となく」という答えに対しても、「そうではないはず」だと返す。

たとえば、図1に対しては「春ののどかさ」を感じるという。

「どうしてそう感じるの？」

「花が咲いているから」

「猫が気持ちよさそうに丸くなっているから」

「花に向かって蝶がよってきたから」

このようなやりとりを繰り返すと、それまではっきり言語化できなかったことが明らかになっていく。

絵画を見るということはただ単に画面を見るだけでなく、描かれているものに対して自分が何を感じるのか、自分自身を見ることにもつながっているのである。

このような作品記述と問答を繰り返すと、教室全体で切磋琢磨し合いながら確実に作品の観察眼が向上していく。ある作品について2～3名を指名して作品記述を発表した後に、他に気づいたことはないか？と問いかけると何人かが挙手をして、それまでの発表では指摘されなかった点をいくつも答えていくなどという授業への積極的な参加も見られた。絵画のなかにすでに答えは見えているのであるから、間違える心配もない。「他の人が見落としたものを自分が見つけた」というのは受講生にとって大きな自信につながるであろう。

美術に関して馴染みのない方々にとって思いもかけないことであろうが、絵画は誰に対しても等しく開かれているのである。確かに、数多くの作品を見て目が肥えている人というのはいる。しかし、絵画は感性がある人しか美的感動を味わえないという訳では決してない。何が描かれているのだろうとほんの少しだけでも考えて見てみれば沢山の情報を受け取ることができる。それは誰にでも見つけることができるのである。そして、この作品観察力は他の分野の学問に関しても応用が利く。今後の大学における学びにおいて大きな武器となることであろう。

受講生の作品記述の発表後、私がそれらにコメントを加えつつ、最後に観察から導き出された解釈を提示する。本図の場合は、多くの受講生が春ののどかな光景を描いた作品だと述べた。しかし、現実には牡丹の花には蜜も芳香もないため、蝶が蜜を吸いに来ることはない。つまり、満開の牡丹の下で寝そべる猫、このいかにもありそうな光景は現実には決して存在しないのである。それでは何故このような作品が描かれるのか。それは猫、蝶、牡丹それぞれに託された意味があるからである。

我々の生活のなかで皿一つとってみても絵や文様が描かれている。絵や文様がなくても皿としての機能が果たせなくなるわけではない。しかし、絵や文様はさまざまなものに描かれている。これらに用い

られるモチーフには得てして幸福への願いが込められている。

本図に描かれている三つのモチーフにもそれぞれ「猫＝長寿」「蝶＝長寿」「牡丹＝富貴」という中国由来の意味がある。このような作品解釈はモチーフの意味、人々の幸福への願いなどを知っていなければ到達できない。しかしながら、作品観察の基礎がなければそれぞれのモチーフが意味を持っていることにも気づくことはできない。「答えは全て絵画のなかにある」のである。

課題

平成 25 年春は幸いにも近隣で展覧会があり、受講者は実作品をじっくりと見る機会に恵まれた。作品の実在感、スケール感、素材感。これらは教室のスライドではなかなか伝えるのは難しい。附属博物館や近在の美術館における鑑賞などを今後は検討していく必要があるだろう。また、より高精細な絵画作品の画像データの入手も必要である。

私が授業を組み立てるうえで最も時間をかけていることは、受講生が観察する絵画作品の選定である。初学者の場合には画面のなかにモチーフが多すぎても少なすぎても作品記述がうまくいかない。延々と連なる山岳を描いた風景画などは情報量が多すぎるうえに記述すべきところと省略してもいいところを区別するのが難しい。したがって、人物画や花鳥画などの描かれるモチーフの数が少ない作品に偏る傾向がある。授業に向けた絵画作品についてさらに情報を収集していく必要がある。

最後に作品解釈についても課題がある。絵画を学ぶ面白さは綿密な作品観察から作品に込められた非常に奥深い世界が立ち上がっていく、その過程にある。これを体感させたいのだが、受講者の側に前提となる知識がある程度必要うえ、より一層の観察と思考の促しが必要となるため集団授業だとなかなか難しい。

それでも、本授業は今後とも「絵画作品を媒介とした双方向コミュニケーション型授業」の在り方を模索し続けていくことを課題としたい。